

津波から命を守るために

おおかわしょうがっこう ぎょうくん まな
大川小学校の教訓に学ぶ Q&A

早稲田大学大学院客員准教授
スマートサバイバープロジェクト代表

さいじょう たけお
西條 剛央

群馬大学広域首都圏
防災研究センター長

かただ としたか すいせん
片田 敏孝 推薦



保護者、教育関係者の皆様へ

この冊子を手にとってくださりありがとうございます。この冊子は、ふんばろう東日本支援プロジェクトの活動から生まれたスマートサバイバープロジェクトで配布させていただいているものです。私自身も伯父を津波で失ったことから、なぜ、どうすれば助かるのかという思いで研究を行ってきました。そして本プロジェクトでは、東日本大震災の教訓を活かし、次の震災が起きたときに一人でも多くの人の命が助かるように活動を行っています。

大川小学校の教訓からは、私自身「子どもの命を守るのは大人である」という当然のことをあらためて突きつけられた気がしています。私には1歳8ヶ月になる娘がいるのですが、娘をみている中で、「子守」とは「子どもを守る」ことを意味していることに気がつき、「この子を守るのは自分なんだ、自分がしっかりしていなければこの子は命をまっとうすることはできないんだ」と思うようになりました。私自身「防災」と聞くと、自分とは遠く感じるところがあったのですが、結局のところ、大切な人の命を守ることなんだと思います。

そして「教育」とはよい人生を送っていくために必要な知識やスキルと身につけるためにあります。ところが、死んでしまったら教育も何も意味をなさないので。生存し続けるための教育はすべての教育の根本にあるべきものです。しかし、現在の学校教育のカリキュラムには、「防災教育」は必須単元として1コマも含まれていないのが現状です。

この冊子は研究結果に基づいているため、子ども達にとっては難しいところが含まれています。ぜひ保護者や教員の皆様が噛み砕いて教え、生き延びるための知恵を授けていただければと思います。本冊子を活用した授業指導案など、随時「スマートサバイバープロジェクト」公式サイトで公開しております。詳しくはインターネットにてご検索ください。

2015年2月

西條 剛央

発刊に寄せて

この世の地獄、東日本大震災発生の日から2年がたちました。かけがえのない肉親も家も何もかも飲み込んだあの津波、数々の悲劇。とりわけ我が母校、大川小学校の悲劇は言葉には尽くせない痛ましい事故でした。

そして地域から子どもたちの歓声が聞こえてこない無気味に静かな日が続き、このような悲劇はこれっきりにしなればと強く思っております。

折しも、ふんばろう東日本支援プロジェクトの方々によって「津波から命を守るために」が発刊されることになりました。まことに時宜を得た企画であり、大川の方々を中心に広くみんなに、また、ときどきは繰り返し読んでいただければとお薦めする次第です。それが本文で強調されている「生存行動」につながっていくと思うからです。

これからも故郷でがんばる人、新天地に移る人、前途は分かれますが、それぞれが安寧でありますように願いつつ……。

2013年6月

大川地区復興協議会会長
おおつき みきお
大槻 幹夫



子どもたちへ ～発刊に寄せて～

大きくなったときの夢を持って、毎日元気に暮らしている子どもたち。津波はそんな子どもたちの命を奪いました。多くの大川小学校の子どもたちが亡くなり、そして釜石でも5人の小中学生が亡くなりました。犠牲となった子どもたち、一人ひとりの無念と、その子の死を悲しむすべての人たちの心情を思うと、悲しくて仕方がありません。

君たちには、亡くなった友達の分まで元気に生きてほしいと思います。そして、今の君たちが思っている素直な気持ちを、将来の人たちにも精いっぱい伝えてほしいと思います。またいつの日か津波がやって来ます。でも、どんなときでも生き抜く力を持った君たちになって、将来の人たちにそれを教えてやってほしいのです。それが亡くなった友達への最高の慰めになるのだと思います。

この本は、東日本大震災の津波を経験した私たちが学んだこと、津波から生き抜く力を身につけるための教訓をまとめたものです。

自分の命を津波から守るためには、もちろん津波のことを知らなくてはなりません。しかし、それだけではダメです。もっと大切なことは、その日その時、どんなことがあっても、どんな理由があっても、すべてに優先して、自分自身の固い意志で、避難することができる子になれるかどうかです。

この本は、そんな子になるための本です。

2013年6月

群馬大学広域首都圏防災研究センター長
群馬大学大学院教授

片田 敏孝



片田 敏孝 (かただ としたか)

群馬大学広域首都圏防災研究センター長、群馬大学大学院教授
岐阜県生まれ。工学博士。ハード重視の都市防災からソフトを重視する災害社会工学を提唱。岩手県釜石市などで防災・危機管理アドバイザーを務め、東日本大震災の津波から多くの小中学生が生き延びた「釜石の奇跡」の立役者となる。文部科学省の有識者会議の委員として「防災科」の創設を提唱している。

おおかわしょうがっこう なに おお 大川小学校で何が起きたのか？

みやぎ けん いしのまき し、りつ おおかわしょうがっこう きたかみがわ、そ かいがん
宮城県石巻市立大川小学校は北上川沿いにある海岸から4kmほど離れた場所に位置する全校生徒108名、教職員13名からなる学校でした。2011年3月11日、帰りの会を終えた頃、14時46分に巨大地震が起きました。14時50分前頃、大きな揺れが収まってから校庭に避難しました。

げん ち には、ラジオやむかえにきた保護者によって、6m、10mの津波がくるといいう情報は入っていました。すぐ裏に避難できる山があり、当時校長が不在の中、教頭や教務主任、安全主任といった先生方、複数の保護者や児童たち、地域住民が山への避難を訴えました。その場には、近隣の小学校の避難マニュアルの改訂に関わり、避難場所を校舎内からこの裏山に書き換えた先生もいました。スクールバスも避難のために待機していました。15時25分を過ぎた頃、数台の市の広報車が「高台に逃げろー！津波が松林を超えてきたぞー！」と通過していきました。

15時35分を過ぎた頃、先生と児童は「三角地帯」といわれるやや高台となっている場所を目指して移動を開始しますが、わずか170mほど移動した時点で巨大な津波に飲み込まれてしまいました。東日本大震災で甚大な被害を受けた地域でも、小学校の管理下にあった児童のほとんどが助かっていますが、大川小学校だけはその場にいた児童78名中70名死亡・4名行方不明（2013年6月現在）、教職員11名中10名死亡、生存率わずか5.6%という戦後の学校教育でも類をみない悲劇が起きてしまったのです（迎えにきた保護者への引き渡しなどにより学校を離れていた30名の児童は無事でした）。



しんさいまえ
▶震災前の
おおかわしょうがっこう
大川小学校



つなみちくご
▲津波直後の大川小学校周辺



ひなんこうほ
▲避難候補にあがった裏山から見た大川小学校。校庭から1分ほどで避難できる場所にある。みぎてまえの木の青い紐が津波到達ライン。



さいしゅうてき
▲最終的に避難しようとして向かった「三角地帯」。ここの津波に飲まれた。

Q1

おおかわしょうがっこう ひげき
大川小学校の悲劇は、なぜ起きたのですか？

A さまざまな情報や意見の板挟みになり、避難の判断が遅れてしまったのです。

おおかわしょうがっこう ひげき は、つなみ ひがひ けいけん したことがない地域に想定外の巨大津波が来たこと、ハザードマップ(災害を想定して、被害がおよぶ範囲を予測した地図)で避難所に指定されていたこと、津波に対する避難マニュアルが整備されておらず、避難訓練や、保護者への引き渡し訓練がなされていなかったことなど、複数の背景要因が重なる中で起きました。

当日は、津波が来るという情報は伝わっていましたが、激しい揺れの中で、山も危ない、道路も危ないと様々な意見に板挟みになり、どうするか決められないまま50分経ってしまい、津波が目前に迫ってきてからやや高台となっている「三角地帯」を目指して移動を開始したものの、すぐに津波に飲まれてしまったのです(文献①)。



Q2

ここから学ぶべきことは何でしょうか？

A 津波の正しい知識を身につけ、「決して他人事ではない」と考え、いつか必ず来る巨大地震に備えることです。

大川小学校で起こった悲劇は、さまざまな要因が重なり合った結果でしたが、間違いなく言えることは、津波のための避難マニュアルが整備されており、万が一を想定した避難訓練がなされていたならば、こうした悲劇は起きることなく、たくさん子どもたちも先生たちも、今も元気に生活されていたろう、ということです。

それでは、なぜ避難訓練をしなかったのでしょうか。それは学校側の認識が低かったことが直接的な要因ですが、その背景として津波の到達が想定されていなかったこと、宮城県が作成したハザードマップで大川小学校が避難所に指定されていたことなども関係していると考えられています(文献①)。

沿岸地域の人以外は「自分には関係ない」「ここは大丈夫」と思っている人も少なくないと思いますが、大川地区でも内陸の「ここは大丈夫」と思っていた人ほど避難が遅れ、津波に飲まれました。また沿岸地域に行ったときに巨大地震が起きることもありえます。そうしたことも想定に入れたならば、「自分には関係ない」とは言えないはずです。

巨大津波はいつか必ず来ます。想定以上の津波が来ても本当に大丈夫なのか、沿岸近くに行ったときに津波が来ても命を守ることができるのか、という観点からこの冊子を読んで津波の正しい知識を身につけることが、大川小学校で起こったことを教訓として活かすための第一歩になります。

Q3

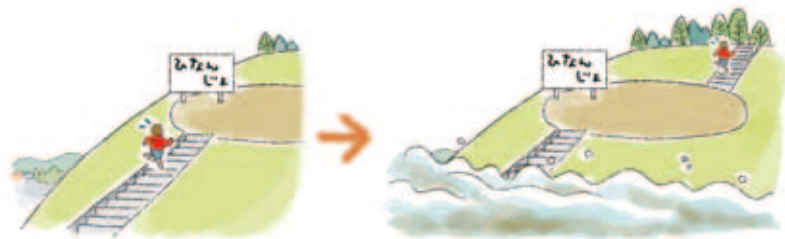
避難マニュアルさえ守っていれば
命は守れるのでしょうか？

A 避難マニュアルに沿った行動が基本ですが、
その場にあわせて「状況判断」するのも大切です。

わかりやすく言えば、避難マニュアルは信号機と同じです。赤信号では渡ってはいけません、青信号で渡りましょう、というのはマニュアルです。同様に、基本的には、津波警報が出たら高台に移動しましょう、警報が解除されたら戻りましょう、というマニュアルに沿って行動することが命を守ることに繋がります。

しかし、青信号であっても、自動車が信号を無視して走ってくることはあります。そういう場合は、その場の「状況」をみて、自分がストップしなければなりません。「青信号、右見て、左見て」と言われるのは、マニュアルに沿いつつも状況をみて判断しましょう、ということにほかなりません。地震や津波が起きたときにも同じことが言えます。

たとえば、指定されている避難所に行っても「これで安心だ」と思うのではなく、その場の状況を踏まえて、津波が届きそうならさらに高いところに逃げる、といった形で判断する必要があります。



マニュアルに沿って...

その場で状況判断!

Q4

想定外の事態に
対応するにはどうすればよいのでしょうか？

A 「今の状況で命を守るために最もよい方法は何か？」
を考えて動きましょう。

災害時には混乱して冷静な判断ができなくなるため「夜、家にいた場合は懐中電灯を持って近所の山に逃げる」「学校や会社にいるときはそれぞれが近くの高台に逃げる」など、あらゆる状況を想定して、避難方法を決めておかなければなりません。

それでも想定外の事態が起きた場合には、マニュアルに沿いながらも「①その場の状況をみて ②命を守るためにはどうすればよいのか？」を考える、というのが命を守るための原則です。

大川小学校では、50分間で震度6、5弱といった大きな地震が9回も起きていたことが、山への避難をためらう要因となっていました(文献①)。しかし「津波のときは高台に避難する」と事前に学校全体で決めていたならば、山以外にもスクールバスで高台を目指して移動したり、徒歩で早めに他の高台に向かうことで、全員助かっていたことでしょう。

また「命を最優先」は当たり前ですが、今回の津波では財布や通帳を取りに戻って亡くなった人もたくさんいます。また一人でならすぐに逃げられる人も集団でいると集団心理が働き、周囲の人が逃げる様子がないと、それに合わせてしまい命を落とすことがあります(文献⑩)。「反対されても避難するよう強く主張する」「誰も逃げなくても自分だけは逃げる」と心に決め、実行することが、「命を最優先すること」にほかなりません。

Q5

状況を判断してといわれても、
何をもちてどう判断すればよいかわかりません。

A 地震の揺れが大きければ大きいほど、
深刻な被害があるかもしれないと考えましょう。

状況をみながら適切な生存行動をとれるようになるためには、
(地震の被害は地震の大きさに応じてひどくなる傾向がある) という
知識を身につけておくことが重要です(文献④)。

これによって地震の揺れが大きいほど、火事や倒壊、津波、崖崩
れ、地割れといった深刻な事態を想定して生存行動をとる、といっ
たように状況に応じた適切な行動をとりやすくなるでしょう。強い
揺れ、長い揺れの場合には津波が来ると思って避難しましょう。

また、津波は大川小学校のように地震発生から50分後にやって
くることもありますし、1960年のチリ津波のように、1日後にやっ
てくることもあります。一波、二波、三波と繰り返してきて、
次第に大きくなることもあります。一度避難したら決して戻って
はいけません。



揺れが大きいほど... ➡ 大きな被害が出ると考えよう!

Q6

震度が小さければ
大きな津波は来ないと考えてよいのでしょうか?

A 震度が小さくとも大きな津波をもたらす
「津波地震」というものもあり、油断は禁物です。

「津波地震」とは、震度が小さくとも大きな津波が発生する
地震のことです。

Q5で、(地震の被害は地震の大きさに応じてひどくなる傾向が
ある) と言いましたが、これはあくまでも一般的な「傾向」であり、
地盤や地形などによって大きな被害が出る場合もあります。

1896年(明治29年)に起きた明治三陸津波では、震度2~3
にもかかわらず巨大な津波が押し寄せ、2万2千人近い人が死亡・
行方不明となりました(文献⑤)。多くの町で半数以上の人が死亡し、
旧田老村では住民2,248名中生存者はわずか381名と8割以上の
人が亡くなっています。揺れが小さいときに津波は来ないと思っ
ていたため甚大な被害が出たのです。

沿岸や河川の近くでは、ラジオや防災無線で津波警報が出たなら
ば、震度が小さくとも避難が必要です。



Q7

津波警報が出て避難しても津波が来なければ、それは避難行動としてはむだではありませんか？

A その場だけ避難するための行動ではなく、生き続けるための行動であり、決してむだではありません。

津波警報が出て避難したのに津波は来なかったとなれば、それは意味のない避難行動と思うかもしれません。そうしたことが繰り返されると、人間はその行動をとらなくなります。

したがって「今避難するための行動」ではなく、いつか起きる大きな災害時に生き延びるための「生存行動」であると考えを改める必要があります。たとえば、信号を無視してもすぐに事故にあうことはないかもしれませんが。しかしずっと信号を無視し続けなければいつか必ず大きな事故にあい、命を失うでしょう。信号を守るということは生き続けるための「生存行動」ということができます。

それと同じように、津波警報が出ても津波は来ないかもしれませんが、だからといっていつも逃げないでいれば、いつか悲劇が起きてしまいます。

ですから、津波警報が出たら、いつか命を救う「生存行動」として、避難しなければなりません。



Q8

生存行動（避難行動）を癖づけるためには、どうすればよいでしょうか？

A 避難訓練や生存行動をしてよかったと思えるような工夫をすることが大切です。

人間は無意味だったと思う行動は次第に小さくなっていく生き物です。したがって、避難訓練や、津波警報が出たときに「生存行動」をとった際には、それをできるだけ意味があるものにしていくことも大事です。

たとえば、女川第一中学校では、高台に避難した際に、そこに備蓄されている非常食をみんなで食べながら、震災や訓練について話しあうことにしたそうです。

避難した際には、それが意味ある行動になるようにすることで「生存行動」が癖づけられるようになりますので、それぞれ工夫してみてください。



Q9

子どもたちに「津波てんでんこ」を教えようと思おうのですが、どうすればよいでしょうか？

A 津波から避難するための「三原則」を子どもたちにしっかりと身につけさせることです。

「津波てんでんこ」とは、「津波が来たら、家族の心配をして家に戻ったりせず、各自でてんでんばらばらに高台に逃げろ」、つまり「自分の命は自分で守れ」という、三陸地方に伝わる防災の教えです。

岩手県釜石市ではこの教えを徹底していたため、市内の小中学生の99.8%が助かり、「金石の奇跡」と呼ばれています。具体的には、「想定やハザードマップ（災害予測図）を過信するな」「助かるためにその状況下で最善を尽くせ」「誰も逃げなくても勇気をもって一番に逃げろ」といった三原則からなります。そして「自分と同じく他の人も逃げているはずだから心配しなくていい」といったように、お互いが適切な「生存行動」をとるといふ信頼があったからこそ、家族を心配して家に戻って亡くなるということがなかったのです。

特に放課後、家族や教師の目が届かない子どもたちが助かるにはこうした教えを徹底することは非常に有効です。命を守るため、巻末の文献やサイト（⑦～⑨）でより深く学んでいただければと思います。



ぼうさいコラム

あの日から ～学校防災担当の立場として～

生徒たちと丘の上で、流されていく町を見たあの日から、いつも考えます。教師として、親として「命を大切に」などという言葉、どれほどの思いで口にしていただろうと。今、私は、一人一人の生徒が命に見えます。学校は、かけがえのない、そして、地域の未来である命を預かっているのです。

私は勤務校で防災教育の担当になりました。これまでの防災マニュアルや避難訓練が、ほんとうに子どもの命を守り、意識を高めるものになっていたでしょうか。震災前、多くの学校では、停電で校内放送が使えず、保護者や役所とも連絡がとれない状態を想定した訓練はしていませんでしたし、避難所として指定されていながら、毛布や食料を備えていませんでした。何より、災害は何気ない日常を襲うのだということを忘れていました。食事が出来ること、勉強が出来ること、「ただいま」を言えること…。当たり前だと思うことは、けっして当たり前ではなかったのです。あの体験を無駄にははいけないと、自分に言い聞かせている毎日です。

大川小学校で起きてしまったことは、悲劇としてよりも、教訓として伝えるべきです。この冊子を学校はもちろん、家庭、地域、専門家の皆さんが力を合わせて、未来の命を守り、輝かせるために役立ててほしいと強く願います。

娘は6年生でした。今日も家に帰れば、「中学校は楽しみだなあ」という声が聞こえるような気がします。

2013年6月

女川町立女川中学校防災担当主幹教諭
さとうとしろう
佐藤 敏郎

佐藤 敏郎（さとう としろう）

震災当時、女川町立女川第一中学校に勤務。震災後の5月、生徒たちそれぞれの想いを五七五に込める俳句づくりを始め、国語教師として指導の中心を担った。（小野智美編『女川一中生の句あの日から』（はとり文庫）として公刊されている。）また大川小学校の遺族として「小さな命の意味を考える会」を主宰し、全国の防災イベントで講演等を行っている。

Q10

ラジオやテレビの津波注意報や警報を
すべて信じて行動してもよいでしょうか？

A ラジオやテレビの津波警報は「予想」です。
それより大きな津波が来ることもあります。

ラジオやテレビの情報は参考になりますが、絶対に正しい情報ではありません。そもそも津波警報とは、ラジオやテレビが気象庁の「予想」したものを流しているだけなのです。したがって、津波注意報や警報が出された場合には「それ以上の津波が来るかもしれない」と考えて行動するのが生存行動の基本となります。

実際、大川地区では、ラジオで当初気象庁から発表された津波の高さを聞いて「それなら自分の家は大丈夫」と判断して、家に戻って津波に飲まれた人もいました(文献¹⁴)。また、地震発生から3~5分で津波が到達し、津波警報が間に合わずに大きな大きな被害が出た1993年(平成5年)の北海道南西沖地震の奥尻島のようなケースもありますので、油断は禁物です。

海岸や河川近くの方は海や川の水が引いたり、また水が引かなくとも揺れが強かったり、長い場合には、津波が来ると判断して高台に避難する必要があります。また「避難した方がよい」といわれたら素直に避難するのが「生存行動」の基本となります。



Q11

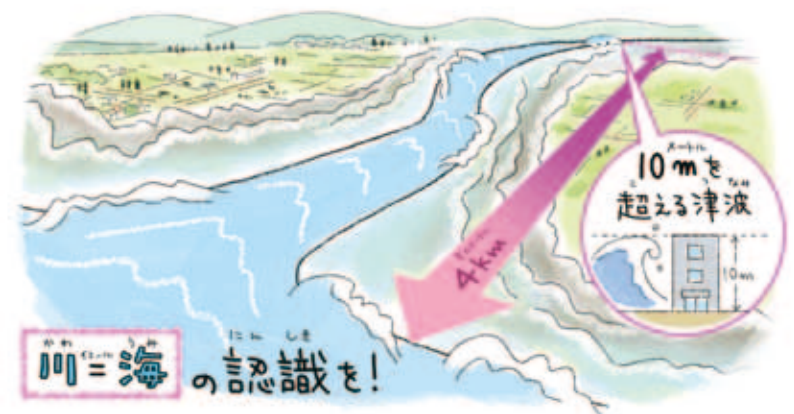
海岸付近でなければ
津波は関係ないのでしょうか？

A 津波は川を遡って押し寄せ、
海岸から離れた内陸まで到達することもあります。

海岸付近でなくとも、津波は来ます。
大川小学校は海岸から4km離れた地点にありましたが、10mを超える津波が来ました。さらに海から49kmほど遡った地点にも3.8mの津波が到達し被害が出ています。海岸や河口付近でなくとも、〈川=海〉という認識を持った上で高台に避難する必要があります。

また、陸前高田市では、海から6kmの内陸まで津波が押し寄せました。東京でいうならば代々木公園まで津波が到達したことを意味します。

こうした事実を踏まえた上で、自分の学校や避難場所は、たとえば高さ数十メートルという巨大な津波が来たときにも本当に安全な場所なのか、あらためて検討しておく必要があるでしょう。



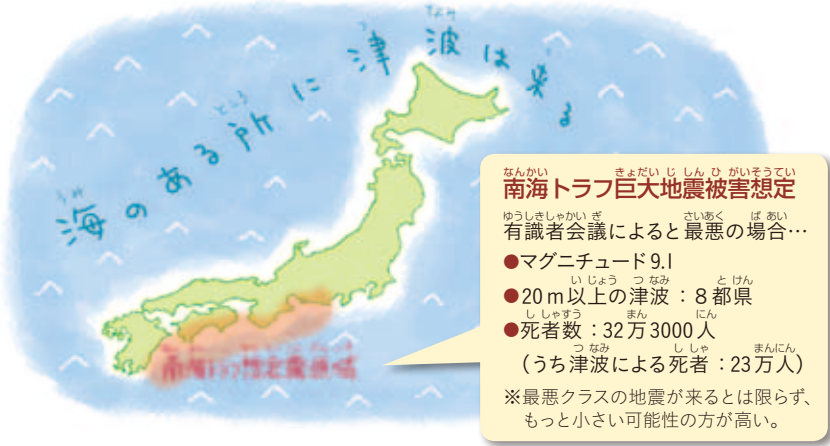
Q12

南海トラフ巨大地震の被害想定が公表されて
いましたが、どう備えればよいのでしょうか？

A 想定されている地域も、そうでない地域も、
警戒し、訓練を重ねることで多くの命を守れます。

南海トラフ巨大地震は、過去、この地域で定期的に巨大地震が
連動して起きていることから、遠くない将来に起こる可能性が高い
とされています。津波による死者数は最大で23万人に達する予測
ですが、迅速な避難により、5分の1の4万6千人に減ると推計さ
れています。巨大地震や巨大津波は、いつか必ず来ると思って十分
な訓練を重ねることで命を守ることができます(文献⑩)。

また想定外だからといって安全というわけではありません。大川
小学校も震災前のハザードマップでは津波は来ないと避難所に指定
されていました。〈津波の経験をしたことがない地域ほど津波が来
たときの被害は甚大になる〉のです。海があるところには津波が来
ると思っておいた方がよく、南海トラフの想定地域はもとより、日
本海側も注意と訓練が必要なのです。



Q13

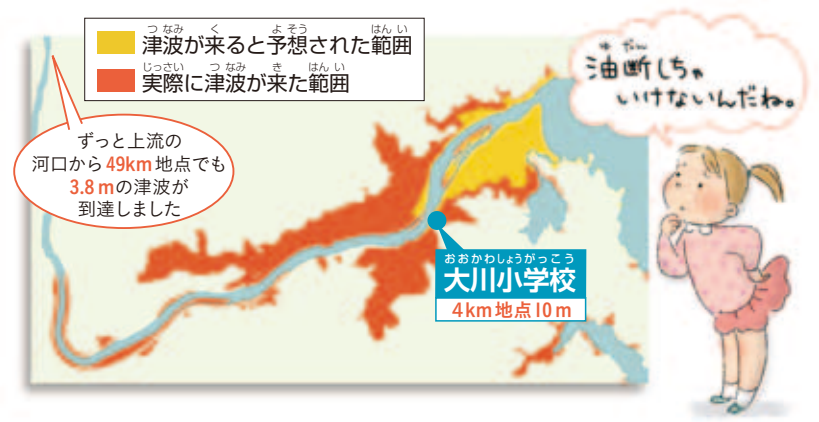
私は沿岸地域に住んでいますが、いままで
一度たりとも津波が来たことはありません。
本当に来るのでしょうか？

A 大津波が来なかった経験が積み重なって油断し、
避難しなかった人もたくさんいました。

これまで津波被害にあったことのなかった大川小学校のある釜谷
集落では、4割近くの人が死亡・行方不明となりました。

過去と未来は違います。「これまで来たことがない」ということ
は「これから来ない」ことを保証するものではありません。宮
城県が作成したハザードマップでは、津波は大川小学校の手前で止
まるとされており、津波の避難所に指定されていました。ハザード
マップも過去のデータに基づき人間が“作った”参考資料に過ぎず、
絶対に安全であることを保証するものではないのです。

したがって、万が一を想定した訓練は必要です。また、津波警報
や津波が来るという情報を得たならば、いつか助かるための「生存
行動」だと思って素直に避難することが大事です。



Q14

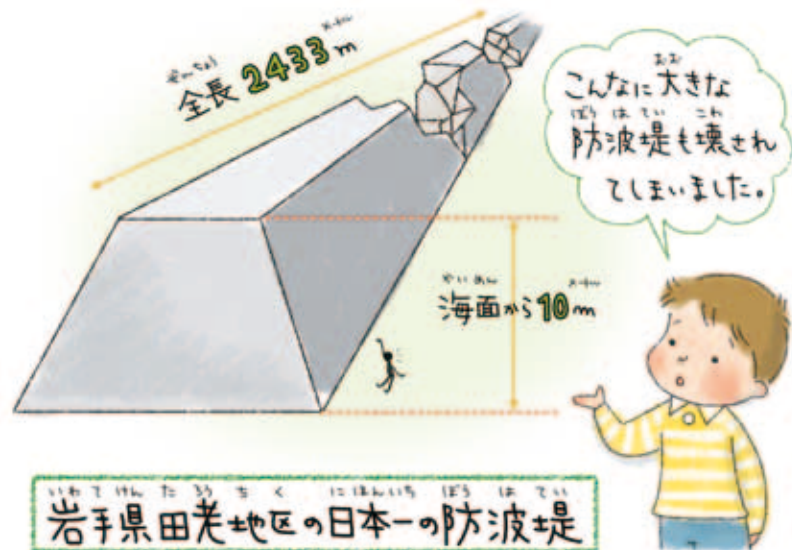
私の町には大きな防波堤があるのですが、それでも避難しなければならいでしょうか？

A 東日本大震災の津波は、いくつもの大きな防波堤を乗り越えたり、壊したりしました。

避難しなければなりません。

東日本大震災では、巨大な防波堤がことごとく破壊されています。岩手県宮古市田老地区では日本一といわれる防波堤も破壊され、1960年に起こったチリ津波を防いだ防波堤があるから大丈夫だろうと思っていた多くの方が亡くなりました。

巨大な津波の威力は、1平方mあたり40tもの力があり、防波堤はそうした巨大津波は止められないと思っていた方がよいでしょう(文献⑥)。たとえ決壊しなかったとしても、津波が乗り越えてきたら、一気になだれ込んできます。



Q15

津波で流されても、泳げれば助かりますか？ ライフジャケット(救命胴衣)を着用することには意味があるのでしょうか？

A 泳ぎに自信があっても、津波に飲み込まれたら助かることは難しいです。

津波はただの波ではありません。木や車、瓦礫を含む土石流のようなものです。泳げないよりは泳げた方が助かる確率は高いですが、時速70kmで迫りくる大木や車にぶつかったらひとたまりもありません。実際、大川小学校では津波に飲まれて奇跡的に助かった児童でも、瓦礫に衝突して気絶、骨折しています。またその他の地域でも、泥を含む海水を飲んで窒息死した人や、長時間水につかっていたため低体温症で亡くなった人もたくさんいます。津波が来たらとにかく高台に逃げるのが確実に助かる唯一の方法なのです。

ただし、想定以上の高さの津波が想定よりも早く到達することも“想定”しなければなりません。大川小で津波に飲まれて生き延びた児童たちはヘルメットを着用していたため浮いて助かったという点が共通していました。避難時にヘルメットとライフジャケットを着用するといったことが、方が一に備えることにつながります。



| あとがき | 命が輝き続けるために

はじめて大川小学校を訪れたのは2011年の4月2日でした。そして、ご遺族の皆さんとお会いしたのは、ちょうど震災から1年がたとうとしていた頃でした。亡くなった子どもたちにお線香をあげさせていただき、涙を流しながら語られるご遺族のお話を哀しみの中で聞くことしかできませんでした。

その後、ご遺族の皆さんの要望を受けて、早稲田大学の研究チームを立ち上げ、石巻市教育委員会の報告書、関連記事が掲載されている550本以上の新聞や書籍、関連文献を精査し、現地でご遺族や地域住民、市の職員、専門家への聞き取り調査も重ね、多角的に検討した知見を論文にまとめました（「大川小学校の“悲劇”はなぜ起きたのか」）。

並行して、私が最も信頼している臨床心理の専門家で、被災各地で150人以上のメンタルケアを行った実績がある方に、ご縁のあったご遺族をサポートしていただきました。また、大川地区に特化したプロジェクトを立ち上げ、ワークショップやお祭りを開催することで、地域の人たちがつながりを取り戻すきっかけ作りに努めてきました。

そうした中で、数少ない生存児童であるT君やそのお父さんとも仲よくなり、2人でお祭りの手伝いをしてくれたり、私のもとに泊めていただいたりしました。

震災から2年がたった頃のある日、T君のお父さんがフェイブブックでT君が書いた文章を公開していました。

「僕はあの3月11日の日に多くの友達を失いました。僕も黒い津波にのめられました。とても冷たく、とても重く、とても苦しく……。言葉では言い表せない恐怖に襲われ、もう駄目かと思いました。しかし、僕は奇跡的に助かりました。僕は友達やふるさとだけでなく家族も失いました。当時3年生だった妹と母と祖父を亡くしました。最近になってやっと家族を失った悲しみを感じるようになってきました。だから、誰にもこんな気持ちになってほしくありません。」

被災者、ご遺族といっても置かれている状況は百人百様であり、震災遺構一つとっても保存したほうがいい、いや解体したほうがいいといったようにさまざまな考えがあります。ただ、「誰にもこんな気持ちになって欲しくない」という想いは、誰もが胸のどこかにあるのではないのでしょうか。

津波はいつか必ずやってきます。この冊子は、津波から命を守り、二度とこうした哀しみを生むことがないよう、上述した研究論文をもとに作成したものです。非営利の教育、普及活動に使用する場合にはご自由にコピーしていただき、子どもたちの笑顔、そして命が輝き続けられるよう、ぜひ広くご活用いただければと思います。最後に、冊子作成にご協力していただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

早稲田大学大学院客員准教授
スマートサバイバープロジェクト代表
さいじょう たけお
西條 剛央

この冊子を読んで、興味を持ってくださった方へ

津波から命を守るために大切なことをもっと詳しく知りたい方は、以下の文献・サイトを参考にしてください。

■大川小学校の悲劇について詳しく知りたい

- ①西條剛央・今野大庫・大泉智・大熊隆靖『大川小学校の“悲劇”はなぜ起きたのか？ SCQRMによる構造化と再発防止案の提案』構造構成主義研究
- ②池上正樹・加藤順子『あのと、大川小学校で何が起きたのか』青志社
- ③池上正樹・加藤順子『石巻市立大川小学校「事故検証委員会」を検証する』ポプラ社
- ④掘込智之・掘込光子『海に沈んだ故郷』連合出版

■津波や津波防災について知りたい

- ⑤片田敏孝（監修）『3.11がおしえてくれた防災の本②津波』かもがわ出版
- ⑥Yahoo!きっず&POKEMON with YOUの「防災について考えよう」
URL <http://event.kids.yahoo.co.jp/bousai/>

■釜石の奇跡から「避難三原則」を学びたい

- ⑦片田敏孝『みんなを守るいのちの授業～大つなみと釜石の子どもたち』NHK出版
- ⑧片田敏孝『子どもたちに「生き抜く力」を～釜石の事例に学ぶ津波防災教育』フレーベル館
- ⑨釜石市『津波防災教育のための手引き』
URL http://dsel.ce.gunma-u.ac.jp/kamaishi_tool/

■災害時の心理について知りたい

- ⑩広瀬弘忠・中嶋励子『災害そのとき人は何を思うのか』KKベストセラーズ

■津波から生還した方の体験や被災地について知りたい

- ⑪三陸河北新報社「石巻かほく」編集局（編）
『津波からの生還～東日本大震災・石巻地方100人の証言』旬報社
- ⑫吉本浩二『さんてつ：日本鉄道旅行地図帳 三陸鉄道 大震災の記録』[コミック] 新潮社
- ⑬ひうらさとる・上田倫子・うめ 他『ストーリー 311』[コミック] 講談社
- ⑭西條剛央『人を助けるすんごい仕組み』ダイヤモンド社
- ⑮西條剛央・ふんばろう東日本支援プロジェクトおたより班
『～被災地からの手紙 被災地への手紙～ 忘れない。』大和書房
- ⑯大川きぼうプロジェクト ～大川地区のみなさんを応援します～
URL <http://wallpaper.fumbaro.org/ookawakibou/>

■南海トラフ巨大地震について知りたい

- ⑰内閣府 防災情報のページ「南海トラフ巨大地震対策」
URL <http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/>

西條 剛央（さいじょう たけお）

早稲田大学大学院（MBA）専任講師を経て、現在同大学院客員准教授。一般社団法人ふんばろう支援基金代表理事、スマートサバイバープロジェクト代表、本質行動学アカデミア代表。仙台出身。博士（人間科学）。専門は心理学や（科学）哲学で「構造構成主義」というメタ理論を体系化。東日本大震災で親戚を亡くし、現地の惨状を目の当たりにしたことをきっかけに「ふんばろう東日本支援プロジェクト」を立ち上げ、2014年9月末の発展的解消まで代表を務めた。「質的研究法」の専門家でもあり、早稲田大学の研究チームを立ち上げ、独自に体系化したSCQRMという研究手法を用いて「大川小学校の悲劇はなぜ起きたのか」を明らかにした。また、塾長である達増岩手県知事の要請により「いわて復興塾」の講師もつとめる。著書に『構造構成主義とは何か』（北大路書房）、『質的研究とは何か』（新曜社）、『人を助けるすんごい仕組み』（ダイヤモンド社）など多数。

ふんばろう東日本支援プロジェクト

東日本大震災を機に2011年4月から活動開始。TwitterとWEBサイトを連動させ、必要の人に必要な物を必要なだけ届ける画期的な仕組みによって、3千箇所以上の避難所、仮設住宅、個人避難宅エリアを対象に3万5千回以上の支援を実現。また、赤十字から支援が受けられない個人避難宅に家電を贈る「家電プロジェクト」、被災者の自立を支援する「重機免許取得プロジェクト」など20以上のプロジェクトを立ち上げ、復興支援のため活動してきました。そして2014年、Prix Ars Electronica（アルスエレクトロニカ賞）という世界で最も歴史あるデジタルメディアの国際コンペティションのコミュニティ部門でゴールデン・ニカ（最優秀賞）を日本で初受賞。過去、革新的なネットコミュニティとして同賞を受賞したWWW（World Wide Web）やWikipedia、WikiLeaksに並び、市民による市民のための新たな自治モデルとして高く評価されました。

現在は、ふんばろう東日本支援プロジェクトから生まれた独立団体と、一般社団法人ふんばろう支援基金として活動を継続しています。

一般社団法人ふんばろう支援基金 <http://fumbaro.org>

スマートサバイバープロジェクト

本プロジェクトは、ふんばろう東日本支援プロジェクトの活動から生まれた防災プロジェクトです。東日本大震災の教訓を活かし、次の震災が起きたときに一人でも多くの人の命が助かるようにするために全国で活動しています。本冊子の無料送付も行っており、これまで20万人以上にご活用いただいています。

現在、小さな命の意味を考える会代表の佐藤敏郎氏（本冊子17ページ参照）による講演や、子育て中のママさん達に震災経験者のママを講師として派遣するワークショップ、津波避難マップ作りのワークショップの提供を行っています。スマートサバイバープロジェクト公式サイトでは、最新の情報が更新されており、本冊子を使った授業指導案や、大川小学校の事故の詳細をまとめた冊子がダウンロードできますので、詳しくはこちらをご覧ください。

スマートサバイバープロジェクト <http://wallpaper.fumbaro.org/survivor/>

津波から命を守るために 大川小学校の教訓に学ぶQ&A

2013年6月1日 初版発行 / 2015年2月28日 第六版発行

著者 西條剛央

編集・発行 スマートサバイバープロジェクト
〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-9 早稲田大学66号館903号室
一般社団法人ふんばろう支援基金 内
問い合わせ：sspj@fumbaro.org

協賛●株式会社スタートトゥデイ / 株式会社トヨタレンタリース栃木

イラスト●斉藤みお デザイン●三富とくほ 校正・校閲●長尾みさこ / 柴崎朋実
